WCRPと社会との関わり

気候科学は社会の価値とどう向き合うか

国立環境研究所
江守正多

Co-productionの3つの論拠

1. Logic of accountability
   （社会のニーズに応える）
2. Logic of impact
   （社会実装のため）
3. Logic of humility
   （科学だけでは答えられない）

1,2は社会における科学のlinear model（科学が知識を生産→社会がそれを使う）を乗り越えていない。これで大丈夫か？

van der Hel (2016)

専門家が単純に「正解」を供給できなくなってきた

- 英国BSE問題（1996）
  BSEの人への感染→専門家不信
  「欠如モデル」から「対話モデル」へ
- イタリア ラクイラの地震（2009）
  専門家の委員会を過失致死で起訴
- 日本 福島第一原発事故（2011）
  「原子カムラ」の「安全神話」批判
  低線量被ばく論争

地球規模の気候変動対策長期目標

- 国連気候変動枠組条約COP21が「パリ協定」を採択して12月12日に閉幕。
- 産業革命前からの世界平均気温の上昇を「2℃」よりかなり低く抑え、「1.5℃」を目指す。

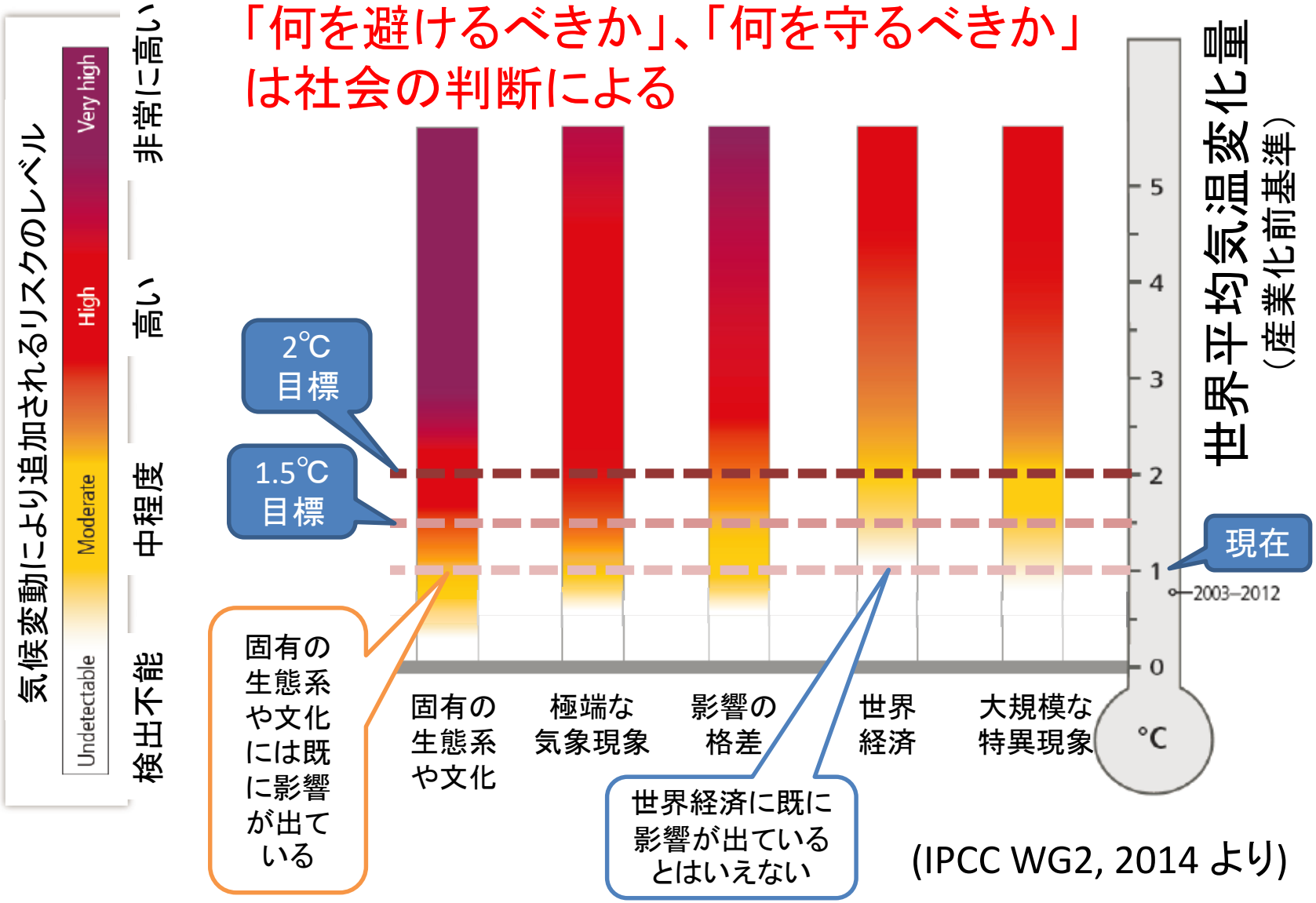
- 今世紀後半に人間活動による温室効果ガスの排出を実質ゼロにする。

✓ では、なぜ「2℃」や「1.5℃」なのか?

✓ それを超えると「危険な」影響が生じるから?

気温上昇量と「懸念の理由」

「何を避けるべきか」、「何を守るべきか」は社会の判断による



(IPCC WG2, 2014 より)

Climate Justice（気候正義）

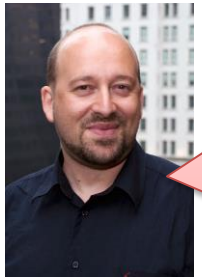
- 今まで温室効果ガスを排出してきたのは先進国（と新興国）。
- 最も深刻な被害を受けるのは貧しい途上国や弱い立場の人たち。

⇒気候問題は国際的な人権問題であるという認識で、社会運動が起きている。

Thomas Stocker
IPCC AR5 WGI
共同議長

「継続した温室効果ガスの排出はさらなる気候変動を引き起こし、将来、数世紀において影響を及ぼす。したがって、気候変動を抑制するには、相当かつ継続した温室効果ガス排出の削減を必要とする、とわれわれは結論づけた。」

これは政治的主張？



ノー！！
事実の表明にすぎない！

Gavin Schmidt
（NASAゴダード宇宙研究所所長）

イエス！！
規範的な意見だ！

Judith Curry
（米国・ジョージア工科大学教授）

政策・政治に対する
科学者の関わり方の4類型
(Roger Pielke Jr., 2007)

1. Pure Scientist（純粋科学者）
2. Scientific Arbiter（質問への解答者）
3. Issue Advocate（特定政策の推進者）
4. Honest Broker of Policy Alternatives
   （政策選択肢の公正な仲介者）

科学者は3を避けるべきか？

「科学の政治化」と「政治の科学化」

「科学の政治化」（Politicized Science）

政治的な関心が高い科学分野ほど「Nature」や「Science」に論文が載りやすく、メディアに取り上げられやすく、研究予算が付きやすい。

「政治の科学化」（Scientized Politics）

本質的には価値や利害の争いである政治的論争が、双方の陣営に都合のよい科学的（あるいは「科学っぽい」）根拠を並べ立てる形で争われる。

⇒「隠れアドボカシー」が生じやすい」

Gavin Schmidt (2015) “What should climate scientists advocate for?”

無責任なアドボカシー
Irresponsible Advocacy

- 自分の価値観を偽ったり隠したりする。
- 自分の政治的立場の根拠を明示しない。
- 価値観の違いを隠すために「科学っぽい」議論を使う。

責任あるアドボカシー
Responsible Advocacy

- 自分の価値観を誠実に表明する。
- 自分の価値観と政治的立場の関係を明示する。
- 自分の価値観が自分の客観性を脅かしうることを認識して常に注意を払う。

Gavin Schmidt (2015) “What should climate scientists advocate for?”

結語に代えて…
「反省的アドボカシー」

（朝山・江守・増田, 2017）

1. <u>透明性</u> (transparency)
   自らの価値観、政治的思想、社会的立場を表明
2. <u>予見</u> (anticipation)
   アドボカシーの社会的影響を副作用を含めて考慮
3. <u>内省</u> (reflection)
   自らのバイアスを認識、自己批判的に問い直し
4. <u>熟議</u> (deliberation)
   多様な視点の尊重、意見の異なる人との対話
5. <u>応答性</u> (responsiveness)
   批判に耳を傾け、応答する責任